

Title	少女エリザベスをめぐって : John Donne, The Anniversaries 研究
Author(s)	高田, ちさ子
Citation	Osaka Literary Review. 16 P.34-P.44
Issue Date	1977-11-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25678">https://doi.org/10.18910/25678</a>
DOI	10.18910/25678
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 少女エリザベスをめぐって

John Donne, *The Anniversaries* 研究

高田 ち さ 子

周年記念詩 (*The First and The Second Anniversaries*) は、ダンの全作品の中で、時期的にも、その長さにおいても重要な作品である。事実、ここ二十年余りの間に多くの研究書が現われ、ダンの代表作としての名を *Songs and Sonnets* と分け持っている。しかし、その評価は実に難しいと言わなければならない。高橋康也氏は、この詩は近代世界の混乱を知的に展望しようとしていると言い、<sup>1)</sup> また事実そうなのであるが、そのような観点から見ると、少女への賛辞は詩にとって余計なものになってしまう。一方、少女としての *funeral elegy* という点でこの詩を考えると、それは全く抽象的で感動に乏しい作品だということになる。多くの示唆に富む批評書があるのだが、それらは必ずしもこの詩の全体的理解を与えてくれるものではない。

この詩は主として二点から考察されている。それは “new Phylosophy” と “the Idea of a Woman” の二つである。前者に関しては、批評家は皆一致して、この詩は “new Phylosophy” がもたらした知的混乱を表現していると言う。しかし、“the Idea of a Woman” の方は諸説が入り乱れている。そして、この二つは全く別々に考察されているのである。しかし、“new Phylosophy” のもたらした世界の崩壊状態を、詩人は少女 = “the Idea of a Woman” の死がもたらしたものとしているのであるから、この二つを結びつけて考えるのは、この詩を理解する上で不可欠のことである。この小論においては、“new Phylosophy” を射程に入れながら、主として “the Idea of a Woman” に焦点をあてて、その意味を明らかに

していきたい。

## 1

ダンの周年記念詩を論ずるにあたって、常に引き合いに出されるのは、ベン・ジョンソンの非難である。

...prepostorous eulogies with execrable extravagancies, prophane and full of blasphemies,...if it had been written of ye Virgin Marie it had been something.<sup>2)</sup>

これに対してダンは次のよう答えたとのことである。

...he [Donne] described the Idea of a Woman, not as she was.<sup>2)</sup>

この詩についての研究書の多くが、ダンの言う“the Idea of a Woman”とは何であるかという解明に捧げられている。少女とは誰か、少女とは何か、という二つの方向があるが、まず少女とは誰かという方向から見ていきたい。

コフィンはこの少女はイエス・キリストであると主張し、エンブソンはロゴスであるという。ロゴスとは三位一体の第二格としてのキリストを指す言葉であるから、ややニュアンスは違うが、コフィンと同様の主張と受け取れる。一周年記念詩の出だしは、死した少女の魂の賛美から始まるが、この描写はそのままキリストに通じるものである。少女の魂は“the first originall of all fair copies” (I.l.228) であり、すべてのコインの鋳型であり、“a strong example” (I.l.48), “perfect circle” (II.l.142) であると、キリストもしくは神を指す比喩が頻出する。マーツは同様の表現から聖母マリア説を主張する。

以上の魂の天上的、精神的比喩に対して、ダンはまだ、世俗的表現を用いてこの少女の美を賛美している。一周年記念詩に於いては、

...she whose rich eyes, and brest

Guilt the West Indies, and perfum'd the East;  
 Whose having breath'd in this world, did bestow  
 Spice on those Iles, and bad them still smell so,  
 And that rich Indie which doth gold interre,  
 Is but as money, coyn'd from her:

(I. II. 229-34)

二周年記念詩に於いては、

Shee, in whose body (if we dare preferre  
 This low world, to so high a marke as shee,)  
 The Westerne treasure, Easterne spicerie,  
 Europe, and Afrique, and the unknowne rest  
 Were easily found, or what in them was best;

(II. II. 226-30)

少女の魂の天上的比喩と美の世俗的比喩は一つに融合されて、次のように歌われる。

As these prerogatives being met in one,  
 Made her a sovraigne state; religion  
 Made her a Church; and these two made her all.

(II. II. 373-5)

ニコルソンは、「至高の国家」と「教会」という表現から、この少女は最盛期のイギリスを統治し、英国教会の首長として君臨したエリザベス女王であると主張する。<sup>3)</sup> 女王と少女の名が一致すること、“Queene”という言葉が詩に現われることから、この説は最も有力なものと考え得る。先程引用した第一の詩の229～234行、第二の詩の226～230行は、海洋貿易が発達した当時にふさわしい比喩である。東インド会社の設立は1600年であり、東方より集められた富はエリザベス女王の宮廷をうるおし、その支配力に強大な力を与えた。またニコルソンは、詩の中で語り手（ダン）の時代は「鉄の時代」と呼ばれ、少女は「黄金の時代」の面影があるという表現より、少女はかつて黄金の時代にこの地上に君臨した正義の女神ア

ステリアにたとえられているのだという。<sup>4)</sup> エリザベス朝においては、女王をアステリアにたとえるのはごく一般的に行なわれたことであった。そして“long she'ath been away, long, long” (I.1.41) という表現は、一年足らず前に死んだ少女よりも、死んで既に八年たっている女王にふさわしい表現であるという。

以上の諸説はそれぞれ詩の中にその根拠を有しており、ニコルソンのエリザベス女王説が最有力だとしても、それは他の説を退けるだけの力を持ってはいない。すべての説が可能となるのは、エレジーとしての形式が要求した誇張に原因があると言える。ダンは大宇宙と小宇宙の照応ということを利用して、一人の少女の死を世界の死とまで誇張してみせた。その中では、彼女の賛美は当然それだけの大きさへと引きのばされざるを得ない。大宇宙の賛辞は、その途方もない大きさ故にあらゆるものにあてはめ得るのである。また、彼女の賛美が全く抽象的であることも、多くの読み込みを可能にしている原因である。すべてが誇張され抽象化された中にあるのは、十五才の少女への最大級の賛辞も決して不調和ではなく、あえてキリストやエリザベス女王への賛辞と受け取る必要はないのである。

この詩に於ける少女が“the Idea of a Woman”であり、彼女の死が“the Idea of a Woman”の死であるとされている、とすれば、“the Idea of a Woman”が指すものは自ずと明らかである。

中世を通じて培われたマリア崇拜は、宮廷風恋愛より生じた女性崇拜と合体して、女性の理想化をもたらした。マリア崇拜と女性崇拜は複雑にからみ合って騎士道精神の一部を作り上げているのであるが、この二面性を有した女性崇拜の一方の極が、女性を完全な美徳の権化、特に宗教的徳の権化として理想化することである。ダンテがその代表的な存在で、彼はキリスト教と女性崇拜を結びつけ、性的、宗教的体験の高貴な融合を生み出した。ベアトリーチェの面影は美化され、霊化され、全徳の権化となり、やがてはダンテの思想や情緒を鍛練し、導く案内者となるのである。ダンテはこの案内者に導かれて、地獄、煉獄を巡って天上へと至り、ついに神を

見ることになる。ここにわれわれは、一人の女性の思い出から理想化された女性 “the Idea of a Woman” の生まれる完璧な例を見ることができ。この理想化の過程は、あらゆる時代にその時代の支配的観念をまとって現われるものであろう。中世に於いては、この理想像は宗教的色彩を持っており、人間（男性）を徳高い高貴な生活に導くものであった。この種の理想化された女性は、後の時代まで長く尾を引いている。ダンテの後に続くペトラルカは、より恋愛色を強めてこれを継承し、多くの亜流を生んでいる。はるか時代が下ると、ゲーテの「ファウスト」に於けるグレッチェンもまた、女性の理想化の好例である。“The Idea of a Woman”（ゲーテの言葉によるならば「永遠に女性的なるもの」）が人々を天上へと導くのである。

ダンの周年記念詩に於ける少女もまた、この種の理想化された女性 “the Idea of a Woman” に他ならない。彼女は美化され、霊化され、キリスト教的美德の権化となる。そして今やすべての人にとたえられ従われる豊かな魂となった少女は、今彼女が一体となっている宗教的喜びへとわれわれを導いていくのである。

シンプソンによれば、ダンにはダンテをイタリア語で読んだ数少ないエリザベス朝人であったとのことである。<sup>9)</sup> 二周年記念詩の中の天上のイメージを思いめぐらす場面 (ll. 321-60) は、ダンテの天上篇の第三十一歌と第三十二歌が表す天上界の光景と酷似しており、ダンはこの描写をダンテから借りたに相違ないと思われる。キリストの花嫁となった処女たちの中にベアトリーチェが座すごとく、この十五才の少女も処女たちの群れに入っているのである。ロワルスキは、ベアトリーチェはダンテ一人の案内人であるが、少女は語り手（ダン）を含めて世の人すべての案内人であるという違いを指摘するが、女性の理想化という点では同じことである。違いはダンテはベアトリーチェに恋しており、ダンは少女に会ったこともない所から生じているにすぎない。現実を越えて理想化された一人の女性が魂の progress を導くという点では両者は全く同じアイデアである。

女性崇拜とは、全面的にこの女性の理想化ということによって成り立っているものであると言い得る。この“the Idea of a Woman”崇拜が、騎士たちの生活、感情、思考に方向を与え、現実世界に対してある統一した見方と意味を与えたと言える。しかし騎士道精神は一つの文化理想に過ぎず、やがて理想と現実の不調和は誰の目にも明らかとなって、物笑いの種へと変化していく。

エリザベス朝には、すでにこの女性崇拜は過去のものとなりつつあったが、それでもなお人々の思考の一部を占めていた。そしてエリザベス女王を得ると、“the Idea of a Woman”の具身化を彼女に見出したのである。女王を理想化した詩は多く書かれ、スペンサーの「妖精の女王」はその代表的なものである。しかし所せん理想は理想に過ぎず、やがて現実の姿を暴露しはじめる。女王の晩年には、後継者問題等で増大する社会不安に加えて、教養の広まるにつれて文化の中心は宮廷を離れ、方向と統一を表わしていた“the Idea of a Woman”という観念は衰えてくる。そしてこの観念が持っていたロマンチックな魅力、牧歌的幻想、プラトニズム的理想主義は打ちこわされ、醜い現実の姿がとって変わるようになるのである。かつて地上に美を与え、統一と意義をもたらした“the Idea of a Woman”は死に、世界は統一を失い、ばらばらになり、美は衰えてしまったのである。理想化された女性の死は、世界の崩壊をもたらしたのであり、ダンは少女＝理想化された女性の死を嘆き、崩壊した世界を解剖してみせたのである。

## 2

“The Idea of a Woman”とは誰かという研究に対して、“the Idea of a Woman”とは何かという方向の研究も数多く行なわれている。“The Idea of a Woman”という言葉の中に、一個人ではないもっと象徴的な意味を読み込むのである。

それらの説の中で最も説得力を持っているのは、マンリーの“wisdom”

を指すというものである。二つの周年記念詩の主題は「現世と来世の正しき評価」であり、それをなし得るのは“wisdom”に他ならず、ダンの時代には“wisdom”はしばしば女性にたとえられたと主張するのである。<sup>6)</sup> マンリーの説は、まことに有力なものであるが、この説が十五才の少女への悲歌であるという事実が無視されているように思える。もしダンが画家であったとすると、死者の家族を慰めるために少女の肖像画を贈ったであろう。しかし彼が少女と一面識もなかったら肖像画は無理であるから、その魂の昇天図を贈ることになるだろう。その絵は下の方にこの世の有様が描かれ、上の方には天上の様が描かれ、その間を魂が昇っていくようなものになるであろう。ダンはこのような絵をまさに詩で書いてみせたのである。一周年記念詩は絵の下の部分を受け持ち、二周年記念詩は天上の部分を受け持っているのである。この現世を表わす部分は、中世を風靡して反宗教改革で新たな流行をみた死の観念（終末、灰、蛆虫等）を表わして、それは天上の賛美と明確な対比を見せているが、かといってそれは「現世と来世の正しき評価」が主題であることにはならない。現世と来世は魂の昇天図にはつきものなのである。

ロワルススキは、ダンが“idea”なる言葉を使うのは“the restoration of the image of God in man through grace”の意味であることが多いと言う。<sup>7)</sup> “Image of God”という語は、マーツもマンリーも使用しており、解釈上の有力な鍵となり得るものである。しかしあまりにも意味の内包が大きすぎる言葉である。もう少し限定された語で、少女の象徴の意味を探っていきたい。

少女は美と徳の権化として表現されているが、そこには常にエデンのイメージがつきまとっている。

Shee to whose person Pradise adher'd,  
As Courts to Princes, ... (II. II. 77-8)

少女の徳は“unvext Paradise” (I. I. 363) にたとえられ、“weedless Pra-



dises” (I. 1. 88) の存在を保証するものであるとされている。彼女は、神がおのれに似せて作られた最初の人間 “best, and first originall/Of all fair copies” (I. II. 227-8) であり、楽園に “some forraine Serpent” (I. 1. 84) が “venemous sinne” (I. 1. 83) を持ち込む以前の innocent な存在であると言える。彼女は、アダムとイブによって引き起こされた原罪に未だその身体を侵されていないのである。

... shee that could drive  
 The poysonous tincture, and the staine of Eve,  
 Out of her thought, and deeds, ...  
 (I. II. 179-81)

“The Poysonous tincture, and the staine of Eve” とは knowledge と引き換えに原初持っていた innocence を失ってしまったことを意味する。ダンは少女の死が人間と世界に腐敗をもたらしたことを次のように歌う。

For, before God had made up all the rest,  
 Corruption entred, and deprav'd the best:  
 It seis'd the Angels, and then first of all  
 The world did in her cradle take a fall,  
 And turn'd her braines, and tooke a generall maime,  
 Wronging each joint of th'universall frame.  
 (I. II. 193-8)

天使の墮落は、人間の墮落を引き起こして、innocence を失い、knowledge を得た人間は楽園を追放されたのである。そして上記の引用のすぐ後で、ダンは “new Phylosophy calls all in doubt” (I. 1. 205) と述べるのである。墮落以前の innocent な存在である少女が死んで、世界は knowledge にあたるというべき “new Phylosophy” がすべてを疑問の中にたたき込んで、人々の存在をおびやかしているのである。“Why?” “When?” と問いかける “new Phylosophy” を捨て、神だけをおおぎ見よと詩人は言う。少女の魂はこの言葉通り、天上の神の元へと急ぐ以外の何ものをも省

ようとしない。以下の引用は語り手（ダン）の魂を表わす箇所であるが、この魂は少女の例に従ってその後を追うのだから、少女にも同様の表現が与えられていると言えるだろう。

... she stayer not in the ayre,  
 To look what Meteors there themselves prepare;  
 She carries no desire to know, nor sense,  
 Whether th'ayres middle region be intense;  
 For th'Element of fire, she doth not know,  
 Whether she past by such a place or no;  
 She baits not at the Moone, nor cares to trie  
 Whether in that new world, men live, and die.  
 (II. II. 189-96)

語り手の魂、そして少女の魂は、“new Phylosophy”を、そして old Phylosophy をも拒絶しており、少女と魂は knowledge に対立するもの、即ち innocence として表現されている。エデンのイメージを具えた少女が歿した後、世界が“new Phylosophy”のために崩壊しているというのは、innocence を失って楽園を追放された人間の状態を表現していると考えられる。少女は innocence であり、ダンはその喪失を嘆き（一周年記念詩）、その回復を希求しているのである（二周年記念詩）。

Innocence というテーマは共通しているのだが、その喪失と回復という別の局面を取り扱っているため、一周年記念詩と二周年記念詩では、少女のイメージは微妙な違いを見せる。一周年記念詩では次のように歌われる。

... shee that could drive  
 The poysonous tincture, and the staine of Eve,  
 Out of her thoughts, and deeds, ...  
 (I. II. 179-81)

ところが二周年記念詩では以下のように変化している。

Gods Image, in such reparation,  
 Wither her heart, that what decay was growne,  
 Was her first Parents fault, and not her owne:  
 (II. II. 456-8)

第一の詩に於いては、少女は未だ侵されざる神に作られし時の innocent なものとして扱われているのに対し、第二の詩に於いては、この innocence が回復されるためには一度侵されたものでなければならぬからである。第二の詩では、少女はこの地上にあって原初の innocence のおもかげを伝えていたが、それは全きものではなく、死によって天上での完成をみなければならぬ。副題の言う「宗教的死」とはまさにこのことを指しており、死は人間を “in white innocence” へと “reinvest” するものである。(II. I. 114)

ロウルスキは先程の引用文中の “Gods Image” という言葉を創世記一章二十六節の “And God said, let us make man, in our Image, after our likeness” と関連づけて、この少女は “the Image of God” であると言う。そしてダンはこの詩に於いて “the image of God created and restored in her” を賛美しているのだと言う。<sup>8)</sup> 彼女の言葉はあたっていると思うが、先にも述べたようにこの言葉はあまりにも意味内包の大きすぎる漠然とした言葉である。

マンリーは、私が innocence という言葉で表現するものを wisdom という言葉で表現する。二周年記念詩だけを考えるなら、マンリーの言葉で十分であろうが、一周年記念詩までを包み込むことができない。少女と対立的に表わされているのは、“new Philosophy” や好奇心であり、少女には常に墮落以前のエデンの園のイメージがつきまとっていることより、innocence がより適切な言葉と言い得る。

二周年記念詩に於いて、ダンは地上の知識の不完全と無価値を強調する。あらゆる地上の知恵の否定は、われわれに聖書の中のパウロの言葉を想起さす。「知者いづこにか在る、学者いづこにか在る、この世の論者いづこ

にか在る、神は世の知恵をして愚ならしめ給えるにあらずや」(コリント前書一章二十節)。ダンは“new Phylsophy”がもたらした知的混乱に倦み疲れ、この世の知恵を“this Pedantry, of being taught by sense, and Fantasie” (II. II. 291-2) として退け、完全なる知、つまり完全なる innocence を享受することのできる神の元へとおもむくのである。

天上に於ける永遠にして完全なる知恵の享受に思いを馳せることを、この詩は“extasie”と呼んでいる。この言葉はあまりにも唐突に出てくるのであるが、それだけダンの強いあこがれが込められていると考えられる。そして、今や神の元へみまかって天上での完全なる知、即ち完全なる innocence を楽しんでいる少女があこがれを持って賛美されることになるのである。ダンは、この少女に現世や自分と全く異質のイメージを与えたのである。即ち、知的混乱に対立するところの innocence とし、その喪失を嘆き、その回復を希求しているのは、十五才という若さで死んだ少女への悲歌として、まことにふさわしいものと言えるであろう。

## 注

- 1) 高橋康也, 「エクスタシーの系譜」(京都: アポロン社, 1966), p. 38.
- 2) “Conversations with Drummond of Hawthornden”, *Ben Jonson*, ed. C. H. Herford and Percy and Evelyn Simpson, xi vol. (Oxford, 1925-1952), I, p. 133.
- 3) Marjorie Hope Nicolson, *Breaking of the Circle*, Revised Edition (New York: Columbia University Press, 1960), pp. 105-6.
- 4) *Ibid.*, pp. 92-7.
- 5) Evelyn Simpson, *A Study of the Prose Works of John Donne*, 2nd ed. (London: Oxford University Press, 1948), p. 45.
- 6) *John Donne's Poetry*, ed. A. L. Clements, “Norton Critical Edition” (New York: W. W. Norton and Company, 1966), pp. 262ff.
- 7) Barbara Keifer Lewalski, *Donne's Anniversaries and the Poetry of Praise: The Creation of a Symbolic Mode* (New Jersey: Princeton University Press, 1973), pp. 223-6.
- 8) *Ibid.*, pp. 112-3.